

# 土佐のわらべ

第365号 《第387回（2011. 10. 13）子どもの本の読書会記録》参加者3名・文書参加4名

『ミセス・タッカーと小人ニムビン』 パトリシア・ライトソン／作 百々佑利子／訳 岩波書店

ミセス・タッカーは快適な老人ホームでの暮らしを捨てて、兄が残したオーストラリアの奥地にある一軒家へ誰にも内緒で移り住んだ。

ところが、この一軒家には地霊小人ニムビンが長い年月住み着いていたのだった。一人暮らしの相棒として選んだ犬のヘクターとともに、ミセス・タッカーとニムビンの争いが始まった。

人の代表として描かれているかのようなミセス・タッカー、そして大自然の象徴ともとれる小人ニムビン。両者の争いは息をもつかせぬ展開をみせていく。

作者のパトリシア・ライトソンはオーストラリアの作家で、オーストラリア大陸原住民アボリジナルの伝承を素材とした作品を多く著しています。この作品もそのひとつです。

今月も読書会ではいろいろな意見が寄せられました。読書会の皆様の感想をご紹介します。

「自然描写がすばらしい。オーストラリア特有の動植物が生き生きと登場しており、ミセス・タッカーと一緒に暮らしているような気がした。」

「挿絵がすばらしかった。線のやわらかさが好きだと思った。」

「ニムビンとミセス・タッカーの戦い方も、その結果にも、ライトソンのオーストラリア土着の精霊たちへの畏敬の念が感じられる。おりしも地震や津波、原発事故など次々と起こる天変地異や想定外の災害に大地のいかりを感じるのは私だけだろうか。」

「児童文学として子どもが感情移入するのに、老人や伝承の精霊やらでは、どのようにすればよいのか戸惑ったが、子どもも老人も規制や限界に苦しむ存在であること、子どもが成長するなかで、この世界には同じ障壁に耐える大人がいるのだと示してやるのが、より建設的であり、役に立つのだと気づいた。著者の提出した問題を子ども自身に考えさせる仕掛けになっているように思う。」

「最初から最後まで一気に読ませる筆力は作者の力量なのだろうが、やはり訳が素晴らしいのだと思う。文章がいきいきしている。アボリジナルの神話も読んでみたくなった。」

「タッカー夫人は決して侵略者でも征服者でもないのだが、ある面では征服者であるのも否定できない。そこがニムビンとの対立を生み出し、ライフルの登場がお互いの対立（戦い）を決定づけてしまう。その後、想像しなかった展開をしていく。私はタッカー夫人がニムビンに負けたように思えて悔しい。悔しいと思うこと自体が間違いかもしれないが……。タッカー夫人がニムビンをコテンパンにして追い出すところを見てみたかった。だが、それではダメ。共存。そのための相互理解が必要。理屈抜きで楽しめる本であり考えさせられる本だった。」

すばらしい本は人々に様々な感情をもたらせます。今月も良い本と出会うことができました。

(N. T)